

# 東京ハロー会・御柱祭

平成十六年四月三日より四日

御柱祭山出し吟行会

平成十六年四月三日(土) 出句者二十一名 於茅野 三駒

棚山 波朗

け 2 御柱木遣に目処を振りに振る

良 3 川風に幣ちぎれとぶ御柱

池内けい吾

波 良 2 おんばしら雄綱雌綱の息合はせ

2 地を擦つて大椀匂ふおん柱

墓目良雨

け 2 御柱過ぎたる道の濡れぬたる

石鍋みさ代

波 け 1 御柱川越しに風募りきし

波 雪解風諏訪の男の木遣歌

武田孝子

石 5 御柱落つ時空へ身を反れり

河野 彩

石 1 アルプスにとどく喇叭や御柱祭

沢ふみ江

波 2 御柱曳くや目処艇子練りに練り

石 3 川越しの空を自在に初燕

1 御柱に蹤ききて稟にまみれけり

飯田眞里子

1 宮川に絶えぬ細波御柱

唐沢静男

け良 御柱曳くまつすぐに湖指して

1 御柱曳きたる夜の火照りかな

1 御柱擦り跡激し大曲り

前川みどり

良石 2 御柱走る木遣りのひと声に

2 元綱の藤蔓にある土湿り

中島八起

波 け 2 街道に曳き跡しるき御柱

1 木落しを待てば高舞ふ初燕

久重サヨ子

け 石 3 御柱坂の地響き足裏に

石 1 御柱曳く腰綱に瓢の酒

1 曳き綱に力縊り込み春祭

伊藤 洋

石 2 吹かれぬる御弊の先の八ヶ岳笑ふ

石 1 子木遣の御弊吹かるる雪解風

1 田畑を過り見にゆく御柱祭

工藤千代

良 1 御柱祭の里を見廻る消防車



小さな鎮守様にも御柱が立っている  
原村 大山祇神社

(目処梃子 めどご、御幣 おんべ)

- 石 目処梃子に諏訪の風受く御柱
- 飯田貢一
- 石 1 御柱の八ヶ岳までつづく木端筋
- 石 1 御柱や声も枯れよと木遣歌
- 石 山出しや八ヶ岳を裾濃に春の空
- 安原敬裕
- 石 1 御柱山より下りて神となる
- 坪井研治
- 石 1 御柱もぬけのからの里の朝
- 島貫和子
- 石 1 御柱とんぼの押せるトタン屋根
- 真木朝美



二階棧敷から声援を飛ばす喇叭隊



曳き綱の結び目



2 みどり山荘庭前に勢ぞろい



木落坂てっぺんの目処梛子に乗った祭衆



木落し坂前で

翌日四日朝  
武田山荘は5センチの雪



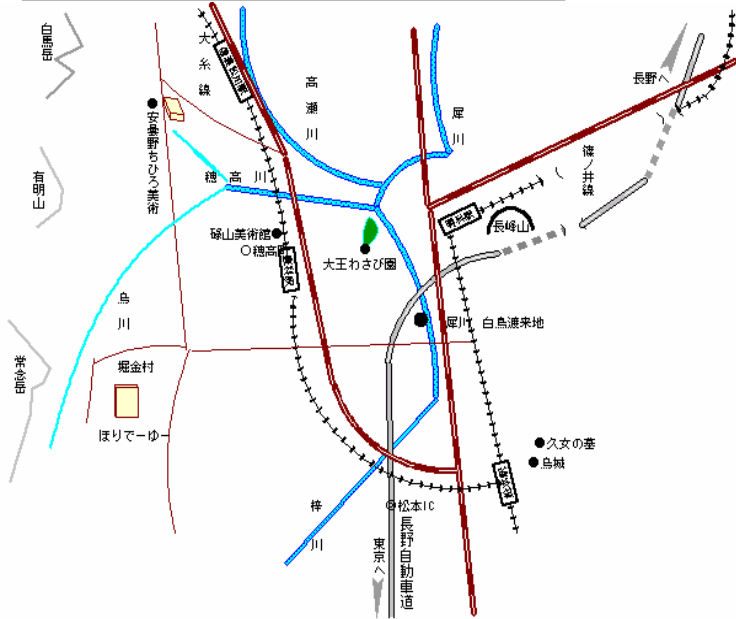
宮川。  
川越し地点



# 安曇野鍛錬会

平成十六年

2004年10月30日～31日



松本市内 杉田久女の墓 (分骨) への道しるべ



松本市内 共同墓地にある杉田久女の墓 (分骨) 赤堀家の墓の一角にある。虚子の手跡といわれる。



「礪山館」の「労働者」像と落葉籠を載せた猫車。



国吉松本城 別名「鳥城」紅葉と初鴈で賑わう。城内では菊花展が開かれていた。



南安曇郡穂高町にある「礪山館」。クリスチャンであった萩原礪山の記念館らしく清楚なたたずまいの美術館。ロダンに師事し絵を描いた、「女」像は是非見たいものだ。



北安曇郡松川村西原にある「安曇野ちひろ美術館」の中庭。しずかに時を過ごすことが出来る。



南安曇郡堀金村大字鳥川にある「まりで一ゆー四季の郷」晴れた日は常念岳を眼前に出来る。鳥川渓谷を面している。



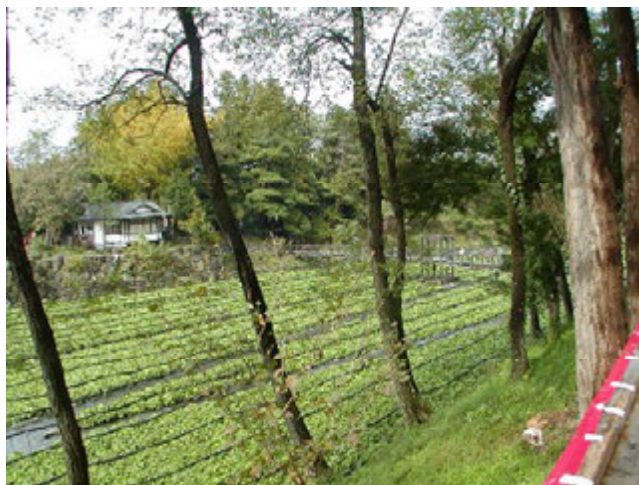
わさび園の食堂で句会

肥料を流れる川に白鳥や鴨がやってきました。川は前日の雨で増水していた。餌付け小屋があり、保護している。



松本中内 日本蕎麦「この」で昼食兼学生会

大まわさび園 湧水を利用した水路が整然と並んでいる。山菜の花の帰花も見られる。5月末の気候。



明科の長峰山山頂の紅葉（標高934m）安曇平、北アルプスを一望できる。常念岳、有明山を正面に見る。



明科の長峰山頂（標高934m）安曇平、北アルプスを一望できる。  
画面左三分の一に見える台形の山が清明山。画面右端に白馬岳がある。

松本・安曇野吟行第一回句会入選句

（句整理 山崎赤秋。写真レイアウト 暮目良雨）

時：二〇〇四年十月三十日（土）

於：ほりでーゆー四季の郷 二〇二号室

参加者：二十六名（各五句出句）

棚山 波朗

良③ わらべらに紅葉且つ散るちひろ館

生 腰ほどの久女の墓や蔦紅葉

② 信濃かな蕎麦屋の庭の照紅葉

① 新蕎麦や煤けし鯉の自在鉤

暮目 良雨

③ 波 新蕎麦や低き長押に槍・弓・矢

アララギの実のつめたさよ久女の地

生江 通子

② 田仕舞ひの煙ひとすじ塩の道

② 背のびして綿虫すくふ指の反り

柚口 満

波② ちひろ描く少女丸顔小鳥来る

波① 笛吹川に初鴨棹を解きにけり

② 葡萄棚もみづる武田終焉地

① 片時雨山隠しゆく鳥城

・・・(以上選者吟、以下五十音順)・・・

飯田 貢一

波良④ 綿虫の綿を広げて飛び立てり

① 新蕎麦の香や低き灯の奥座敷

飯田眞理子

波満① 暮の秋抱へるほどの久女墓

② 秋雨の濡れ色の濃き天守閣

伊藤ひろし

③ 秋時雨濡羽いろなる鳥城

② 久女の墓菊をかほらす雨来る

① 新蕎麦や川の激ちの信濃ぶり

窪田 明

良 ちひろの絵みるほのぼのと暮の秋

倉林 美保

① 秋思かな久女の墓の濡れてをり

① しろじろと物焼くけむり草紅葉

島谷 高水

良② 一匹を見つけ綿虫増えて来し

① 初鴨の濠に縄張りあるのらし

島貫 和子

② 新蕎麦や木戸口を打つ古暖簾

杉阪 大和

良③ それぞれの秋思ちひろの「少女」達

生③ アルプスの水に打たれし走り蕎麦

③ 綿虫や鉾黒々と大手門

① 湖畔まで山の錦の下りてきし

田口石竜子

満 しぐるるや久女の墓の濡れそぼり

② 冷やかや蕎麦屋の鴨居の弓と槍

② 大綿や軒影深き長屋門

① 差しのべし掌に翹たたみ雪ばんば

武田 孝子

波満① 初鴨のまだ群れとかず鳥城

満② 天竜川となる水迅し一位の実

① 畑中のちひろ美術館小鳥来る

① 武者窓へ紅葉時雨の明かりかな

中川冬紫子

良 新蕎麦や風をはらませ篠ノ井線

良 初時雨久女の墓に供華新た

① 葛紅葉高架にかかる鉄梯子

中島 八起

⑥ 信濃路やかすかに甘き一位の実

① 白壁の崩れし土蔵雪ぼたる

奈良 英子



生 初鴨の水尾に天守の歪みけり

② 雨沁むる久女の墓や秋深し

① 晩秋や雨に寂ゆく鳥城

林 あきの

波③ 石仏に雨やはらかし草紅葉

② 新蕎麦や鴨居の矢羽黒光る

① 蹲に一枝浮ぶ蕎麦の席

藤野 濤子

波① 離れ住む子に秋思ふとちひろの絵

生① 雪蛩蕎麦屋の門をくぐりけり

① 新蕎麦や鴨居に古き弓と矢と

前川みどり

波 秋冷の含めば甘き山の水

④ 色なき風見るやちひろの子の瞳

③ ちひろ描く笑みのにじみや秋時雨

松浦 克子

① 甲斐駒ヶ岳の初冠雪や雲切れて

① 時雨るるや久女の墓の虚子手跡

① 手にとまる感触なくて雪蛩

松川 洋酔

波① 初鴨のはや睦みある城の濠

生 新蕎麦や久女の眠る城下町

満③ 雨に燃ゆ満天星紅葉久女の墓

① 秋霖を突き抜けてバス信濃路に

百瀬 信之

波満⑥ 初鴨の水尾に崩れし城の影

① 濁り川岸辺に菊の残りけり

守田 和之

満② 秋霖の信濃につまし久女の墓

山崎 赤秋

生 掌に受けてほのあたたかき一位の実

① 田に深き轍のあとや秋深し

吉田百合子

良② 羽搏ち鴨天守の影を乱しけり

生③ 手のひらに青く透きたる雪蛩

松本・安曇野吟行第二回句会入選句

時：二〇〇四年十月三十一日(日)

参加者：二十六名(各五句出句)

※朝食までに出句。移動中バスの車中で選者五人が選。

棚山 波朗

生奈 榎櫃の美色づく旅の信濃かな

満 鯉の背に桜紅葉の朱の走る  
 良 安曇野の山水を飲み秋惜しむ  
 袖口 満  
 良 紅葉晴へ片雲脱ぎし常念岳  
 奈良 英子  
 波 色変へぬ松の雫や大手門  
 波 初鴨の陣解く水尾の重なれり  
 満 安曇野の雨に暮るるや茸汁  
 ・・・(以上選者吟、以下五十音順)・・・  
 伊藤ひろし  
 良 冷まじや安曇野に水ほとばしる  
 良 夜をこめて雨音をきく紅葉宿  
 窪田 明  
 良 晩秋の銃眼深き鳥城  
 奈 内堀の桜紅葉や雑魚群るる  
 倉林 美保  
 波 荒壁の蔵へ消えたり雪はんは  
 良 手の届くところに穂高くわりんの実  
 島谷 高水  
 良 雲海に秀を出す八ヶ岳に秋惜しむ  
 良 山の秀のどんみり秋の中空に  
 奈 笹を打つ落葉松林の露時雨

杉阪 大和  
 奈 野仏に榎檀実るも信濃かな  
 田口石竜子  
 奈 のべる手の先へ先へと雪螢  
 武田 孝子  
 波 秋深し赤い帽子のちひろの絵  
 良 久女の墓名もなき草のみづれる  
 満 花枝雨に籠れる鳥城  
 良 綿虫の綿の軽さを思ひけり  
 中川冬紫子  
 良 初鴨の群れを離るる声を出す  
 良 初鴨の声をひろげて泳ぎけり  
 中島 八起  
 良 首振りて挨拶交す初鴨  
 林 あきの  
 生 雨流る城の石垣薦紅葉  
 藤野 滯子  
 生 枯れ切つて枝振りあらは葡萄棚  
 満 逝く秋のまなざし遠きちひろの絵  
 前川みどり  
 良 やや寒の安曇野の湯のやはらかし  
 松川 洋酔  
 良 刈田道あまた和合の道祖神

山崎 赤秋

良 樂しげに鳴らす彫刻小鳥来る

良 溢れゆく温泉や常念岳に霧流れ

満 父母の横眠る久女や草紅葉

吉田百合子

良 信濃路やアルプス閉ざす霧襖

松本・安曇野吟行第三回句会入選句

時：二〇〇四年十月三十一日（日）

於：大王わさび農場

参加者：二十五名（各二句出句）

棚山 波朗

満① 奉納の草鞋に籠る放屁虫

臺目 良雨

満奈 裸婦像の紅葉明りや碌山館

① わさび田の百尺をとぶ秋の蝶

生江 通子

奈 にじますの池黄菖蒲の返り花

奈 鈴生りのくわりんの匂ひ雨上る

柚口 満

生③ 裸婦像の背筋に榎植明りかな

奈良 英子

波① 碌山館出でて榎植の尻仰ぐ

満 落葉籠嵩うつくしき碌山館

③ 山葵田のみどり明りや水澄めり

・・・（以上選者吟、以下五十音順）

飯田 貢一

波 彫刻の女息づく里の秋

生① 秋天に翔つ尖塔のフェニックス

飯田眞理子

波良① 夭折を惜しむ詩の碑へ黄葉散る

伊藤ひろし

波 碌山館紅葉明りに鐘響く

① 苔むせる屋根に音せず朴落葉

窪田 明

良 やはらかに流る山葵田石たたき

倉林 美保

良奈④ 常念岳の雲展けゆくけらつつき

良② 湧水の水草紅葉日をはちく

① 胸を張る碌山の像鳥紅葉

島貫 和子

満① 碌山の胸の病や茨の実

杉阪 大和

⑤ 山葵田の水と照り合ふ野紺菊

② 初雪嶺四方より信濃日和かな

中川冬紫子

奈① 秋冷や碌山館の煉瓦敷

中島 八起

波 秋深し黒光りする「女」像

良生② 山葵田を洗ふせせらぎ小鳥来る

林 あきの

満③ わさび田に陽のこぼれ落ち返り花

藤野 澪子

波良生① 彫像の顔の歪みや賜高音

① 碌山へ光太郎の詩碑落葉散る

前川みどり

波奈④ 片腕の像の武骨や楓散る

③ 鑿跡の粗き木椅子や花梨の美

松浦 克子

① 蔦紅葉碌山はいま親しまる

松川 洋酔

生⑥ ゆく秋の山葵田日がな鳶の笛

④ 一位の美甘し碌山血を一斗

百瀬 信之

② 黄落やうす曇りなる鳶の空

守田 和之

奈① 湧き出づる水アルプスの秋はらむ

山崎 赤秋

③ わさび田の曲れば秋の水曲る

吉田百合子

波満② 放屁虫こもる祠の大草鞋

② 秋闌くる触れて冷たき女人像

選者略号

波：棚山 波朗

生：生江 通子

奈：奈良 英子

良：藁目 良雨

満：柚口 満

ryo\_u@mta.biglobe.ne.jp



青蛙堂